

## 参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「孤独・孤立に想う」
著者 / 所属	佐伯 道子 / 厚生労働委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	450号
刊行日	2022-10-3
頁	2
URL	<a href="https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20221003.html">https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20221003.html</a>

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75013) / 03-5521-7686 (直通))。

## 孤独・孤立に想う

厚生労働委員会 専門員

さえき みちこ  
佐伯 道子

8月の終わり、宿題の課題図書が難しいと娘がぼやいていた。何かと思えば、アニメーション映画がよく知られている『火垂るの墓』だった。意外な気がしたので、手に取ってみた。改めて読んでみると、空襲や飢えの描写によって浮き彫りになる戦争の悲惨さ理不尽さはもとより、終戦前後の社会や人々の無関心・無慈悲に加え、中学生の兄は自ら周囲との関係を拒絶しているようでもあり、兄と幼い妹が社会や地域の中で孤立していく様に胸が苦しくなった。けれども、それは小説や昔のエピソードと割り切れるものではなく、戦後77年を経た今、孤独・孤立は様相を変えて重大な社会問題となっている。

新型コロナウイルス感染拡大の前から、自殺、児童虐待、ひきこもり、8050問題、子どもの貧困など様々な問題に関連して社会的孤立（家族や地域社会との交流が客観的に見て著しく乏しい状態）への対応の必要性が指摘されていたが、感染の拡大及び長期化は私たちの生活に大きな変化をもたらし、社会に内在していた孤独・孤立の問題を顕在化させるとともに、一層深刻化させた。生活困窮等の相談件数、DV相談件数、児童虐待相談対応件数、不登校児童生徒数などが増加した。また、2020年3月から2022年6月にかけて、コロナ禍の影響により増加した自殺者は約8,000人に上るとの試算も公表されている。

そうした状況の中、政府は、2021年2月に孤独・孤立対策担当大臣を任命し、12月には孤独・孤立対策の重点計画をまとめている。孤独・孤立対策を「社会全体で対応しなければならない問題」と位置づけ、基本方針として、①支援を求める声を上げやすい社会、②切れ目ない相談支援、③「居場所」づくり・「つながり」を実感できる地域づくり、④NPO等の活動支援、官・民・NPO等の連携強化を掲げた。今後もこれらの基本方針に沿った施策が着実に実施されること、福祉分野にとどまらず、教育、雇用、住宅など幅広い分野で孤独・孤立対策の視点を織り込んだ実効性のある施策が推進されることを期待する。

孤独な人、孤立している人には、そもそも他者との関わりを好まない人もおり、誰かに相談する、コミュニティに参加するなど、「つながり」を持つ行動を起こしたり、継続することが容易ではないこともあろう。支援する側のアプローチにも困難が伴うことが推察され、現場で支援活動に携わる相談員等の精神的な重圧は大変なものであると聞く。支援を行う人材の確保・養成とともに、孤独や孤立は解消できるものであり、助けを求めることは難しいことでも恥ずかしいことでもないということを積極的かつ効果的な情報発信により社会に浸透させることも政府の重要な役割であろう。DXの推進など技術や知恵も駆使して、人と人との適度な距離感を保ちつつ関わり合い、社会との「つながり」がある、あるいは必要なときには「つながり」を持つことができるという安心感が得られるような、誰にとっても暮らしやすい新たな地域社会の実現が望まれる。